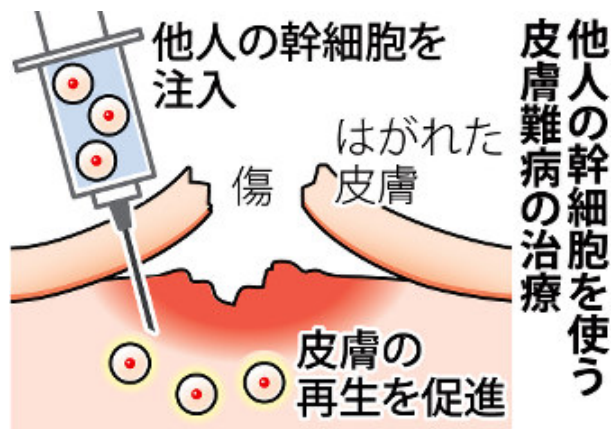


阪大

他人の幹細胞で皮膚再生 難病に治験開始へ

毎日新聞 2017年4月17日 19時18分 (最終更新 4月17日 23時42分)



他人の幹細胞を使う皮膚難病の治療

ささいな衝撃で皮膚がはがれる難病「表皮水疱（すいほう）症」の患者に、他人の幹細胞を移植して皮膚を再生させる臨床試験（治験）を大阪大チームが週内にも始める。別の病気の治療で販売されている「間葉系幹細胞」を利用、治療法確立を目指す。

表皮水疱症は、遺伝子の突然変異で皮膚の接着が弱く、弱い力ではがれたり水ぶくれができてたりする。国内の患者は500～1000人。

治験では傷の周囲に幹細胞を注入し、炎症を抑

えて環境を整え、皮膚再生を促す。移植を受けるのは、胸の傷が10年以上開いたままの成人。最大3回移植し、状態を調べる。2年間で計6人の治療を予定している。

使用する間葉系幹細胞は、他人に移植しても拒絶反応が起こりにくいという。健康な人の骨髄から採取し、骨髄移植の副作用治療に使われている。チームはこれまで、患者3人に家族の骨髄から採取した幹細胞で臨床研究し、数年～十数年治らなかった傷が治って2年以上良好だ。だが採取の体への負担が大きく、販売されているものに替える。玉井克人（かつと）・大阪大寄付講座教授は「患者の生活を改善したい」と話した。（共同）

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.